
ピュアソウル

蒼井森子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピュアソウル

【Zコード】

Z5782C

【作者名】

蒼井森子

【あらすじ】

大学生のヒロは自分の居場所がわからない。大学生活を楽しんでいる周囲とは馴染めず、自分が何をしたいかすらわからない。同じクラスのユリは心に深い傷を負っている。ヒロを自分に似ていると思い、思いを寄せる。しかし、ヒロはその重圧に耐えられるのだろうか。

心に傷を負つた者たちが進むべき道とは・・・?

「ねえ、ヒロ聞いてる?」

ユリが擦り寄るよつに僕の肩に横顔をもたれかけてきた。

「え、何が?」

ユリの髪のにおいが僕の鼻をくすぐる。

「もう! また人の話を聞いていないんだから。」

2-1 講堂は西日が差し込んでいて、講堂の暖房で十分すぎるほど温められている上に、太陽の熱が加わる。陽の光は単に室温を上げるだけでなく、僕の意識を恍惚にも似た不思議な幸福感で満たしてくれる。

ぼんやり頬杖を付きながら夢見心地でユリの言葉が頭の中を揺れる。

「アツロウの部屋にみんな集まるんじゃなかつたつけ?」

「それがだめになつちやつたのよ。」

ユリもアツロウも同じ法学部の1年生だ。入学前のオリエンテーションで近くに座つたのを機に、なんとなくいつも一緒にいる。大抵の学生が何かしらのサークルに所属しているのに対し、僕らはどこにも入っていない。どこにも入っていないあぶれもの同士が自然と寄り集まってきた、ただそれだけの集団だ。

「なんかアツロウさ、この前合コンした女の子とうまくいっているみたいなんだよね。だからうちらとの飲み会なんて眼中にないつていうか。まあ、バイトのない日は彼女と過ごしたいに決まってるんだけどさ。」

「じゃあ中止?」

「えーやだあ。だつて私かなり楽しみにしてたんだよ。」

飲み会なんて別に興味ないのに。」

けれど僕の意思などなんの意味もないのだろう。コリはヒロが常に賛成することを前提に事を進めていく。それに抗うことすら何か面倒でヒロはコリの言葉をさえぎることはしない。

「で、考えたの。一人暮らししているのはあとアヤとチカとシュンとタツヤでしょ。アヤとシュンはそれぞれ兄弟とショアしているから、ダメ。チカは6畳ワンルーム。タツヤは四畳半だからとてもじゃないけどみんな入れないの。」

「ふうん。」

「だからさあ、みんなさえよければばつばつかなつて？」

大学から三十分ほど私鉄に乗つたとある駅の近くにコリの家はあつた。

「えー、本当にお邪魔しちやつていいのかな？」

「いいんじやない。コリ本人が言い出したんだし。」

「まあね。そう深く考えないで楽しもつよ。」

都心から程近い住宅街の中にある駅前のロータリーには品のいい老若男女が行きかう。美しい街並みにふさわしい人々が切り取られた絵のようになっている。その風景はごく自然にも、ものすごく自然にもどちらにも取れる。ここに住む人々はみんな同じ方向をみんな疑うこともなくそこを指し、そこに向かつて進んでいく。どこか人工的で生命力が乏しくて、ヒロは息苦しさを覚えた。

「お待たせ！」

待ち合わせ場所にコリが現れた。

「みんな揃つてる？」

これでアツロウを除く7人が揃つた。

「つちすぐそこだから、行こうー。」

コリはアヤとチカと先頭を歩き、残りの男たちはそれに続いた。商

店街の途中の路地を右に曲がるところにかなり大きなマンションが目の前に飛び込んできた。

「つか、こじよ。」

「すじつ……」

マンションに足を踏み入れると「お帰りなさいませ」とホテルのフロントのように制服を着た若い男性が微笑んだ。床は大理石が敷き詰められ、ロビーにはイタリア製のソファーがガラス越しに庭園が見える配置で並べられている。見るからに高級感の漂うこのマンションに圧倒されみんな口数が少なくなっていた。

ココの家はこのマンションの最上階らしい。エレベーターは14階で止まった。

「コリちゃん！」

エレベーターのドアが開くと同時に小さな男の子がコリに飛びついてきた。

「カイ！やだあ、おつかのなかで待つてなさいって言つたじゃない。」

「だつて、コリちゃんのお友達が来るつて言つから、待ちきれなかつたんだよ。」

小さな男の子は口を尖らせてコリのスカートにまとわりついた。体を半分隠しながらも初めて会う人の学生を意識してちらつと様子をうかがっていた。

「やだあ、ごめんね。みんなびっくりしたでしょ。この子、弟の力イ。」

「えー、こんな小さな弟がいたの？」

チカがみんなの声を代弁していた。どう見ても4・5才の幼児だ。ココとは一回りくらい離れているのだろうか。

最上階はコリの家族のためだけのフロアだった。エレベーターを降りた途端、戸建のように樹木が並び小さな庭ができるがつていた。丸太を組み合わせて作られたブランコが見える。カイと呼ばれる弟

のためのものだろう。

「やあ、いらっしゃい。」

ユリの両親は一人とも穏やかで人当たりのいい感じの人だつた。母親はユリに良く似た華やかな顔立ちではあるが、控えめでやさしげな微笑をたたえていた。父親は何かスポーツをやつている人だろう。細身ではあるが、筋肉質な体つきをしている。歳は50歳くらいだろうか。

「みなさん、いつもユリがお世話になつています。今日は遠慮なさらずによつくりしていつてくださいね。私たちはカイを連れて今から出かけますので、留守をよろしくお願ひしますね。」

ユリの母親が丁寧に頭を下げた。

「僕、初めてミッキーのホテルに泊まるんだよ！」

カイが頬を紅潮させながらソファーの上を無邪気に飛び跳ねている。3人は今夜浦安に泊まる予定らしい。

「出かけるんなら早く行けばいいのにね。みんなにあいさつするなんて言って待つてたのよ。おかしいでしょ、うちの親！」

「なんか絵に描いたような幸せな一家つて感じ。」

届いたばかりのピザをほおばりながら、アヤが大げさにため息をついた。さつきまでの緊張感はすっかりほぐれ、20畳大はあるリビングのソファーでみな思い思いにくつろいでいた。

「だつて、こんな素敵なおうちに、かつこいいお父さん、美人のお母さん、かわいい弟。うちとは偉い違い！」

「お父さんは普通のサラリーマンだよ。ただ、死んだおじいちゃんがここ一帯の土地を持つていたから、相続税が払えなくて。仕方なくこの土地をマンションにして最上階を我が家にしたというわけ。」

「でもすごいよー。うちなんかさあ、田舎の親、仕送りたいへんよ。お兄ちゃんと私一人で東京に出ちやつたから。電話来るたんびにこぼされるもの。『母さんは服一枚も買えない』って。」

「アヤは仕送りしてもらえるんだからいいじゃん。俺なんか、家か

ら通える範囲の大学しか受けるなつて。アパート代なんか出せないからつて、受験する前から宣言されちゃつたし！」

シユンもビールを片手に笑い転げた。

「いいじゃん、おまえら。俺奨学金借りてるからさ、大学でたら返済しなきゃならないんだぜ。だから他の奴らみたいにサークルだのなんだのやってられないんだよ。」

「そういう意味では同じじゃないんだぜ。だから他の奴らみたいにサークルに入つていいからこそ、知り合えたんだし。」

「なんか格差社会を実感しちゃった感じ！」

「畜生！おれは絶対ビッグになつてやる！」

シユンが立ち上がりビールを一気に飲み干した。みんな、腹を抱えて笑い転げていた。

「ヒロ、実家どこだつけ？」

チカが缶ビールを差し出した。

「仙台。」

いぐら12月とはいえ、コリの家は床暖で心地よい暖かさだ。ビールを飲むにはちょうどいい。

「ふうん、ヒロは育ちがいいでしょ？」

「なんで？」

「わかるわよ。うちの男どもにはわからないだらうけど、女はそういう嗅覚するどいからね。ヒロはお坊ちゃんの匂いがするもの。」

「ちがうつて。」

居心地悪い間が一瞬あつた。

「まあどうでもいいんだけど。」

チカの白い肌がほんのり桜色に染まつてゐるようだつた。照明が落とし気味になつてゐるので、色彩までははつきり見えない。

「ねえ、ヒロ。ヒロはコリと付き合つてゐの？」

思わせぶりな仕草でチカがヒロを見つめる。

「そういう関係じゃないつて。」

「やつなの？じゃあ、ヒロ、私と付き合つても何の問題もないんだ。」

「そりやあ問題なんかないけどさ。でもとりあえずコリはチカより近い存在だけね。」

「ヒロ、ひどい。傷ついたから。」

チカは冗談めかした言い方をしながらも、指を絡ませてきた。

誰かが持つてきたのだろう。ホラー映画のDVDがついていた。時計は午前0時をまわっている。みんなそのDVDを見ているのかと思えば、寝息を立てている者もちらほらいた。

のどが渴いた。キッチンに入つて冷蔵庫の中のウーロン茶を探していると、誰かが入つてきた。明かりをつけていないので顔が見えない。

「コリ？」

返事はないが、そこに誰かが確かにいる。

「あの、コリのお友達ですか？」

背の高い細身の女がすぐそこに立つていた。メガネをかけているのと暗いのとで顔ははつきりわからなかつたが、その声はコリによく似ていた。

「あ、はい。おじゃまします。」

「ごめんなさい、私今帰つてきたといふ。何か飲んだらすぐ血分の部屋に行きますから。」

他にも家族がいたんだ。

「ウーロン茶でいいですか？」

とつさに手に持つていたウーロン茶の缶を差し出した。

「ありがと。」

触れた手はひんやりしている。

女はプルトップを開け、のどを鳴らしてウーロン茶を飲みほした。しんと静まり返つたキッチンに、彼女の中に染み入る音だけがやけに大きく響いた。心臓の音が聞こえてしまつのではと心配するほど、

胸が高鳴っていた。顔も見えない女に、ヒロはまちがいなく性衝動を感じ、それを抑えようと思を整えた。

「あの、ユリさんのお姉さんですか？」

声がうわずつた。

「ええ。」

ぎこちない空気がキツチンでよどんだ。手を伸ばせばすぐ届く距離にいる。アルコールのせいだろ？ 何かきつかけがあれば、ヒロは間違いなく彼女を無理やり押し倒していくに違いない。

突然明かりがついた。

「ヒロいるの？」

ユリが驚いたような顔で立つていた。

「どうしたの、ユカちゃん？」

「ああユリ、ごめんなさい。私今帰つて来たの。お友達来てたの知らなくて。お邪魔だからすぐ部屋に行くわ。気にしないで。」

驚いている僕に気づいてユリが言つた。

「ヒロ、この人私の姉。ユカよ。」

「お姉さんもいたんだ。ユリ、3人兄弟だつたんだ。」

ユリは微笑んだだけで返事はなかつた。姉のユカに僕を紹介した。

「ユカちゃん、こちら駒田ヒロくん。私と同じ大学のお友達。今日は他にもリビングにいるんだけど。」

「ユカさんもいっしょにいかがですか？ といつてもみんな寝ちゃつてているみたいだけど。」

ユカがくすつと笑つた。

「ありがとう。でも私ももう限界。シャワーを浴びてすぐにでもベッドに入りたいの。駒田さんゆっくりしていいくださいね。」

ユカはウーロン茶の缶を置いて、キツチンを出た。

「ねえ、ヒロ。」

映画はそろそろエンディングに入つた。ユリが持つてきた毛布をみんなにかけたときには、テレビの画面ではテロップが流れていた。

「結構楽しかったね。」

ユリが大きく伸びをしてソファーに倒れこんだ。

「うん。」

「たまたま寄り集まつたのが始まりだったのに、いつの間にか大切な仲間になつてゐつていつか。」

「うん、わかる。」

「なんか不思議だよねえ。」

「去年の今頃はなんの接点もなかつた人間同士なのにね。」

ユリがヒロの肩にもたれかかつてきました。

「ヒロ、私つてアヤよりも近い友達に過ぎないの？」

ユリの目がヒロをじつと見つめる。

「聞いてたんだ。」

「聞いてたよ。アヤがヒロに迫つてゐみたいで気が気じやなかつたもの。」

「別に迫られてないつて。」

「絶対、迫られてたもん。」

ユリは子どものように口を尖らせてふくれてみせた。

「ユリつてすゞいよね。」

「何？話をはぐらかさないで。」

「はぐらかしているわけじゃないよ。ユリはほんとにすゞいつて思つたから言つたんだ。自分の気持ちをまつすぐ相手に伝えられるところ。ほんと、すゞいよ。」

「じゃあ言わせてもらひうけど、ヒロだつてすゞいよ。」

「何が？」

「そうやつて核心からするうとすりぬけけりとこ。」

ユリがふいにキスをした。

「ふふ。またすりぬけられちゃつたね。」

ユリの甘い唇はめまいを誘う。唇の感触をゆっくり味わいながら二人の影は重なつた。

クリスマス以降大学の講義はめっきり少なくなる。年が明ければセンター試験、入学試験。その合間を縫いつゝて学年末の試験が行われる。

アパートの入口にあるポストの扉を開けると、『じつそりチラシ類があふれ出た。コンクリートのたたきの上になだれのようにじつそり落ちた。ダイレクトメールや怪しげなピンクチラシなどアパートのポストはいつも満杯だ。こまめに処分しないと、本来入るべき大切な手紙のスペースがなくなってしまう。隣のコンビニのゴミ箱に捨てに行こうとしゃがんで拾っていると、和紙で折られたもえぎ色の封筒が1通そのチラシ類に紛れ込んでいることに気がついた。母からの手紙だった。

ヒロは急いで部屋に戻り、深く息を吸つてから、丁寧に封筒を開けた。

「ヒロへ

元気でやっていますか。こちらはざい分寒くなつてきました。東京もすっかり冬なんでしょうね。父さんはいつもと変わりず。母さんは子供たちがみんな出て行つてしまつたので手持ち無沙汰です。最近よく夢を見ます。夢の中でヒロはまだ小さな男の子で人ごみの中ではぐれてしまつた。母さんは大声を上げて必死に探すのだけど見つからなくて。自分の叫び声に驚いて目が覚めるのだけど、その夢をみるたびにあなたのことが心配で。ヒロは3月に上京したつりちつとも仙台に帰つてきませんが、お正月は帰つてきてくださいね。母さんも父さんも心配しています。食事はちゃんととっていますか。外食ばかりでは体に悪いですよ。それからお正月にはナオキもハルトも帰つてきます。年に一度くらい家族みんなで顔をあわせたいものです。母より。追伸 新幹線代余分に振り込んでおきました。今から座席を取るのは大変かもしれません、仙台までなら2時間くらいなんですし、がまんして立つていらっしゃい。

手紙を何度も読み返した。便箋に並ぶ母の文字は変わらず美しく、

やせし間に満ちていた。

「じめん、母さん。」

母の手紙に心が揺らいだ。

「ねえヒロ。」

ユリの甘ったるい声が耳元でわざやかれ。

「お正月は仙台に帰るんでしょう?」

みんなで集まつた飲み会のあと、ヒロはクリスマスイブをユリと一緒に過ごしていた。

ヒロのアパートの狭い部屋で一人は小さなケーキにろうそくを灯し、『メリークリスマス』とさわやきあつて甘いキスに溺れた。ユリは帰るに決して遠くない自分の家に戻るつとしなかつた。両親の顔を知つてゐるだけに、罪の意識がヒロの胸をちくりと刺したが、ユリにとつてそんなことはどうでもいいようだつた。『メールで友達の家に泊まるつて言つてあるから大丈夫よ』と全く聞く耳を持たない。『どうしようかな。』

「やだあ、まだ決めてないの?」

「うそ。」

「おうちからは何も言つてきていの?」

「別に何も・・・」

咄嗟に口から嘘が出た。

「ねえ、ヒロの実家つて何してるの?・・・みたいなサラリーマン?・

「そんなことどうでもいいじゃん。」

きつい言い方になつてしまつた。

「別に深い意味なんてないよ。ただなにやつてるのかなつて思つただけ。なにいらついてるのよ。」

気まずい空氣が流れた。適当にユリの話に合わせとけばいいだけなのに。何むきになつてるんだろう。

わかつてゐ、嘘を重ねたくないんだ。嘘は重ねれば重ねるほど、はがれやすくなる。そしてはがれるとときは一部でなく全てが剥がれ落

ちる。

「俺、バイトに行って来るから。」

振り返らなかつた。自分の背中をユリがどんな顔で見つめているのか、その目でヒロの嘘を見通してしまいそうで、だからヒロは逃げた。

ヒロは早足でアパートの階段を駆け下り、バスビおりをひたすら歩いた。

どこへ行こうかなんて決めていなかつた。ただただ自分の嘘を現実から削除させたくて、もちろんその方法などあるわけがないのだから、まつたくもつて無意味なのが、こみあげる感情の持つて行き場を探すためだけにただ歩き続けた。

「おまえはいつもそうやって逃げてばかりだ。」

父が大きな目を見開いてヒロをにらみつけている。

「俺は自分で自分の行き方を決めたいだけなんだ。」

「虚勢を張るな。現実を見る。自分自身と向かい合え。」

「わかつていてるが、自分自身は。見えていないのは親父のほうだ。」

「いつだって俺のことを見ようとなんかしなかつたじやないか。」

「やつやつていつも本題を摩り替える。甘えてばかりいるな。」

高校に入学した頃からよく父とぶつかった。ぶつかるのはわかっているからできるだけ父を避けてきたが何かの拍子に出来つとつもこんな調子だった。

深夜腹が減つて下に降りていくと、父が一人でウイスキーを飲んでいた。父のことなど気づかないようにリビングを抜けてキッチンに入る。冷蔵庫の中を「ひそ」を探していると、後から父の低い声が僕を羽交い絞めにした。

「おまえは医者になる気はないのか？」

「父は酔っていた。」

「おまえが医者になる気さえあれば、どこの医学部にでも入れるよつに道筋立ててやることくらいならできるんだ。」

キッチンのカウンターにもたれながら、血走った目で僕を捉えた。

「しかし、おまえにその意志がないのなら、俺にはどうしようもない。ナオキもハルトも俺が口出ししなくても、黙つて医者の道を選んだ。なのにおまえだけは、何を考えているのかまったくわからん。」

「父は吐き捨てるようにこうつぶやいて、グラスをカウンターに叩きつけた。クリスタルが粉々に砕けたり、琥珀のさらりとした液体とどす黒いどろりとした血液が床に滴り落ちた。

「あなた、どうなさつたの？」

ガウンを羽織つた母が寝室から飛び込んできた。紙のように白くなつた顔に表情は消えている。

「まあ、大変。けがをしているじゃない。」

血にまみれた父の手をタオルで押さえようとした母を遮つて、父は言つた。

「おまえはいつも何も言わない。肝心なことからはいつも逃げる。そんなことだからだめなんだ。」

ヒロは外科医の父、専業主婦の母、有名国立大医学部の長兄、有名私立医学部の次兄を家族に持つ、世間に言わせればずい分裕福な家庭に生まれ育つた。兄二人は既に父の後を追つよう医師になるための道を着実に歩み始めていた。

ヒロは兄たちが通つた私立の男子校に当然のように進学していたのだが、成績はまったくふるわなかつた。

「駒田の弟か。」

教師たちは学校でヒロを見るなり、親しげに話しかけた。そして

「君も兄さんたちと同じように医者の道を歩むんだな。」

と肩をぽんと叩いた。

しかし実際、「駒田の弟」の成績は兄たちのような優秀なそれと

は全く違うものだった。からうじて1年の前期試験で50位以内に入つたものの、その後は全く無名の存在となつた。初めの頃は「そろそろ本氣出せよ」なんて笑つていた教師たちも、「元氣でやつてるか」と哀れみにも似た表情を向けるようになつて行つた。

その頃のヒロは戸惑つていた。生まれたときからいつも目の前にあつたまつすぐな道を当たり前のようにたどつてきた。特に努力した覚えもないが、駒田家のご多分に漏れず常に成績は優秀。周囲から医者になるべくして生まれてきたとちやほやされ、そのまつすぐな道はいつまでもまつすぐ続していくものとばかり思つていた。しかし、高校に入った頃からその道がだんだん細く険しく氣でも緩めば踏み外しかねないものに変わつていた。優秀な子弟が学ぶ学校。学業も途端に高度なものとなり、必死にしがみついていなければ振り落とされそうな勢いで進んでいく。

気がつけば、草原をひた走る馬たちの群れから一人振り落とされた迷い子となつてしまつた。そして細く険しい道すら見えなくなつてしまつた。

こんなとき、普通は立ち止まって考えるのだろう。自分の進むべき道はどこにあるのか。自分はどうしたいのか、どうなりたいのか。道が見えなくなつたのなら、その道を自分で切り開いていけばいいだけのことだ。しかし、ヒロは宙に浮いた得体の知れないチリのようで、心もとなげに漂うしかなかつた。漂うことで逃げていた。自分の目の前にあつた途切れるはずのないまつすぐな道が、父親の思惑で整備された偽りの道だということを認めることがただただ逃げたかつた。

けれどいちばん厄介だったのは自分自身の持つプライドだった。医学部の道をあきらめると言つ一言が言えず、二浪した。父と兄二人の大きな壁がいつも目の前に立ちはだかり、僕を見下ろしている。しかし一浪しても希望の医学部には入れず、たまたま受験科目が一緒に受けていた一流私大に入学金を納めた。疲れきり、廃人のように丸めた僕の背中を母がさすってくれた。

「ヒロは今から自分の道を探せばいいの。お父さんの言うことなんか聞き流しなさい。人生は長いの。ゆっくり探して『ごらんなさい』医師になる道が決定的に閉ざされてしまつてから、父と会話することはもちろん、目を合わせることもなく、結局ヒロは逃げるよう仙台の街を後にした。

ヒロは中央線のある駅前に立つていた。この駅の目の前の大通りから少し入ったところに大学に併設された大学病院がある。ここの大學生を一度受験したが失敗した。二度目の、と思って受験したがそれでも門は開かなかつた。

この大学に入つていたら自分の人生は変わつていたのだろうか。ヒロは考える。少なくとも実家に帰るのに躊躇するような自分ではなかつたはずだ。なんだか他人事のように笑えた。

「おい、ヒロ。ヒロじゃないか。」

通りの向こうから若い男が駆け寄つてきた。

「ハル兄。」

次兄のハルトだつた。ハルトはこの大学の医学生だ。

「なんだ、どうしたんだよ。俺に会いに来たのか？」

「そうかもしれない。」

ヒロの口から嘘は流れなかつた。素直な気持ちがなめらかにほどばしつた。いくらハルトがこの大学に通つてゐるからといって、ここに来れば会えるわけではない。が、ハルに会いたいという気持ちがここに向かわせた。

「おお、かわいいこと言つてくれるじゃないか！」

ハルトはヒロの肩を抱き寄せる素振りをしてはしゃいでみせた。

「で、本当はなんなんだ。」

浪人時代、ハルトに呼び寄せられて何度かこの大学のキャンバスを歩いたことがある。ハルトは中学からラグビーをやつていて今もこの大学のラグビー部で活躍している。体育会で培われた精神力と

男気がいつもまぶしかった。すぐ目の前にある手が届きそうで届かない絶対的な目標だ。医大に進学して仙台を離れてからも、ヒロを気遣つて、たびたび実家を訪れていた。

「母さんから手紙が来てさ。正月帰つてこいつて。」

「俺んとこも来たぞ。家族みんなで集まりましようつてな。」

駅前の居酒屋はまだ誰も客がいなかつた。せつかく会つたんだからとハルトがヒロを誘つた。夕方5時になつたばかりで、さすがにこの季節すっかり暗くなつていたが、ちょっと飲むには早いような気がして躊躇していたが、地下に入ればそんなことも忘れてしまつた。

「ハル兄本当に帰るのか？」

「俺は毎年帰つているからな。そのつもりでいるけど。」

「ナオ兄は？」

「母さんの手紙だと今回は帰つて来るみたいだぞ。ナオ兄は2・3年帰つてなかつたからな。たまには母さんに顔を見せないとまずいだろ。ヒロ、おまえはどうするの？」

「俺は、正直言えば帰りたくないんだよね。」

「まだ気にしてんのかよ。」

「母さん、氣い遣つて新幹線代まで振り込んでくれたんだけどさ。「まじで？俺には振り込まれてないぞ。くそ、やっぱ末っ子はかわいいんだろうな。なんか差アついていいか・納得イカねえよ。」

ハルトはレモンハイを飲み干してくしゃくしゃな顔で笑つて見せた。心地よい酔いが全身に回つた。

「どうだ、大学生活にも慣れただろう？」

「そうだな、慣れたよ。」

「ヒロはゆつくり生きればいいさ。自分に正直に生きりよ。」

「なんだよ、ハル兄。なんか年寄りくさい言い方だなあ。」

二人で結構飲んだ。ずい分飲んだなあと思つて時計を見たがまだ7時。2時間ほどですっかりできあがつてしまつたことになる。

「ヒロ、俺のマンションに寄つていいくか?」

「いいよ、今日は帰るわ。」

「正月は帰らうな。」

「さあね、どうじょうかな。」

「おまえは自信もつて生きる。おまえは大丈夫だよ。」

「ハル兄、相当酔っ払つてゐるだろ?」

「酔つてないわ、ずっと言つたかったことだから。」

「そう?」

「ああ、俺はおまえがうらやましいよ。」

「うらやましいって、俺なんかに何言つてゐるの?」

「おまえはコンプレックス持つてゐるんだろ?自分は落ちこぼれみたいな。」

「決まつてゐるじゃないか。馬鹿にしてるのか?」

ヒロは声を荒げてハルトをにらみつけた。

「おまえはまだ気づいていないのぞ。」

ハルトは力なく笑つた。

居酒屋を出て地上に上がつた。ふと横断歩道の向こうに田をやると、細身の背の高い女が大学病院の方角からこちらに向かつて歩いていた。メガネをかけて髪は無造作に一つに束ねてゐる。信号が変わり、横断歩道を渡り始めたところで気がついた。

ユリの姉、ユカだ。

「どうした?」

「急に黙りこくつたヒロにハルトが気がついた。」

「知り合いか?」

ヒロは黙つてうなずいた。

ユカは、ヒロに全く気づかず、足早に駅の中へ消えて行つた。

「ヒロ、おまえの知り合いって、メガネの背の高い女か?」

「ああ。」

「知り合いつてまさか付き合つてゐるとかじゃないよな。」

「知り合いつてまさか付き合つてゐるとかじゃないよな。」

「まさか。友達の姉貴だよ。」

「ならないんだけど。」

「なんかひつかかる言い方だよな。」

「あの子、俺と同じ医大生だよ。」

ユカが医大生？意外だった。ユカと大学の医学部がうまく結びつかない。ハルトに心の揺れを悟られないよう、できる限り冷静に言った。

「だからなんだよ。」

「ちょっとと曰くつきの女つていうか、惚れない方がいいと思つよ。これ、兄貴としての助言だから。」

「なにそれ？」

「いや、おまえが彼女を見る目つきがちょっと違つてたからさ。勘違いなら別にいいんだ。悪かつたな、気にするな。」

僕はハルトとの会話は上の空で、ユリの実家でユカに会つたときのことを思い出していた。あのとき闇の中で、確かに僕はユカに惹かれかけていた。あのとき彼女に触れたいと思つた。唐突な衝動に身が震えていた。

部屋に戻つたが、ユリの姿はどこにもなかつた。がつかりしたようなほつとしたような、ユカのことを聞きたいという気持ちはもちろんあつたが、ユリのことだ。本心を見透かされかねない。僕はがつかりした気持ちはさて置き、安堵感に満たされそのままベッドに倒れこんだ。

どのくらい眠つていたのだろう。陽はすい分高く上がつているようだ。カーテンの隙間から差し込む日差しにぼんやりと思つた。

「起きた？」

ユリが部屋の隅に座つていた。

「家に帰つたんじやなかつたの？」

「うん、荷物を取りに帰つてただけ。」

コリは無邪気に笑つてみせた。

「荷物つて。」

「2・3日分の着替えとかお泊りグッズとか・・・。」

「はあつ?」

「だつて帰るんじょ、仙台。私も一緒に行こうと思つて。」

コリはバッグからもえぎ色の封筒を取り出して、テーブルの上に置いた。

「ごめんね、読んじゃつたの。だつてヒロひたら机の上に出しつぱなしにしてるから。」

体中の血液が逆流していくような気がした。

「お母さん心配されてるじやない。ちゃんと帰んなきやだめだつて。私もヒロの家族に会つてみたいなあ。どんな人なんだろ?。お母さんはすぐ優しい人みたい。それに上品で知的で・・・。うん、わかるのよ。あの手紙を読めば、どんな素敵な人か想像つくわ。やだあ、ヒロ心配してるんじょ。そうよね、いきなり彼女連れて帰つたら、お母さん驚いちゃうわよね。大丈夫よ。ちゃんとホテルはとつたし、ヒロの邪魔になるようなことはしないつもりよ。」

「帰れ。」

自分で驚くほど大きな声が出た。

「えつ?」

「帰れよ。」

「だからごめんつて。手紙を勝手に見たのは悪かつたわ。」

コリは、何本氣で怒つてるの、とても言いたげな、困惑した顔で立ち尽くしている。

「帰れつて言つてんだよ。」

押さえきれない怒りがこみ上げてきていて、コリを殴りかねないとさえ思つた。コリのバッグを押し付け、あいでも玄関の方を指した。

「ごめんなさい。」

「おまえ最低だぞ。」

コリは青ざめた顔で、黙つて部屋を出た。

結局正月は仙台に帰らなかつた。

腹が減れば、コンビニで買ひこんできたカツ丼を腹に流し込み、それ以外はこたつで寝つぱなしの生活。テレビはつけたままだつたので、正月番組が小うるさくいらした。でも何も音のない世界にいるよりはまだと思ったので、テレビの電源を切ることはしなかつた。

確かにユリのしたことは許せない。ユリに對して怒りの感情を持ったのは事実だ。けれど、その一方で気づいてはいた。触れられたくない部分に踏み込んできたユリを許せないという自分自身にいちばん腹が立つていたのだ。あの手紙を読んだからといって、ユリは何も知りえない。それほどあの手紙はぐく普通の当たり障りのない手紙だつた。

僕は自分の弱さを隠すために鉄の鎧を何重にもしてきている。

あの手紙はその鎧のいちばん外側の薄い膜に過ぎないのに、その膜に触れられただけで、こんなにも自分を抑えきれないほど逆上してしまつた。いつかはその鎧を脱ぎ捨てたいと思つていたはずなのに、現実は頑なに拒否している。結局僕は幾重にも張り巡らされたバリケードの中に身を潜める小さな子どものままだつた。その現実に向き合えないことにいらだつっていたのだ。

1週間たつたがユリからは何の連絡もない。替わりにとでもいうのか、チカからのメールが入つていた。

「チカです。ヒロ元気にしてた？実家から帰つてきて暇なんだ。みんなどうしてるかと思って。学校始まる前に、みんなで初詣に行かない？いまさら初詣なんて言わないでよ。暇な人は明日11時に原宿駅前の歩道橋の上に集合！宿題のレポート持つてくれたら助かります。」

「了解」とだけ返信した。
ユリも来るのだろうか。

原宿駅前の歩道橋は、冬休み最後の買い物をしたのか、中高生風のカップルやグループでごったがえしていた。

「ヒロ！」

ヒロが歩道橋の袂で不安げにきょろきょろしているのが、歩道橋の上からだとよく見える。チカの声に気づいて、ヒロは軽く手を振った。

「何？ 来てるのチカだけ？」

階段を駆け上つてきたヒロは不満げな顔でチカを睨んだ。

「そうなの、私だけ。みんなレポートが終わらないんだって。」

すつとぼけてヒロに笑いかけた。

「じゃなくて、おまえ他の奴に連絡してないんじゃないの。レポートが終わっていらないんなら、俺のレポート担当で絶対にあいつらこの場所にやつてくるはずだろ？ 自分の力でなんとか終わらせようなんて思つ奴らじやない。」

「やっぱ、ばれた？」

「みえみえだよ。」

ある程度予想はしていたのだろう。ヒロは怒るといつより呆れてい るようだった。

「まあまあ、せつかくここまで来たんだし、明治神宮をお参りしようよ。お参りした後でゆっくりレポート見せてちょうだい。」

「なんだよ、ちやつかりしてるとかよな。」

ヒロは今日一日チカに付き合つ覚悟はできたようだ。

参道に入った途端、さつきまでの喧騒がまるで嘘のように静寂に包まれていた。少しの観光客と近所に住んでいるあたり子どもたちがちがりまじりいるだけで、都会の真ん中にいることを忘れてしまった。

「ゴリ落ちこんでるよ。」

思い切つて切り出してみた。

「チカに話したんだ、あこつ。」

「自分勝手でわがままなあの子が今回ばかりは本当にくじらである。」

「当然だよ、あこつ非常識だからな。」

「わかつてゐるわよ。そんなこと。あの子ね、ほんと、バカみたいに舞い上がつちゃつて、思考回路がどうかしけつたのよ。」

「なんで舞い上がるんだよ。」

「ヒロわからぬいの?」

「何が。」

「ゴリはね、ヒロがゴリを家に置いてくれたこと、本当に喜んでたんだから。どうせヒロのことがだから付き合おうとかなんだと全然言つてないだろ?」
「でもさ、好きでもない子を何日も泊めたりしないでしょ、普通。だからあの子、嬉しそうでどうかしちやつてたの。もちろん勝手に手紙を見ちゃつたことは許せないわよ。でもそりや手紙の内容がやばかつたら、見なかつた振りをしたはずよ。そりじゃなかつたから、またヒロに一步近づけたような気になつちやつて、一緒に仙台に行こうなんて馬鹿なこと考えたんだつて。まあそこまで飛躍しちやうのはあんまりにないけどな。でもそれだけゴリはヒロのこと好きつてことなのよ。」

あーあ、私つてほんとお人よし。これじゃゴリヒロの恋のキュー
ピッヂじゃない。

「俺、あのとき感情的になつちやつたけど、頭冷やしたから。」

珍しくヒロが素直に自分のことを語ってくれた。いつもとじつと好きなんだ。

「ねえヒロ。確認していい?」

「なに?」

「あなた、ゴリのこと本氣で好きなの?」

「本氣でなんつこわけつと、断言しつづけにせよ、ゴリのことせよ好きだよ。」

「胸が痛んだ。」

「あるいは言い方。」

「どうして？」

「ちゃんと自分の逃げ場を用意してゐるみたい。」

「そんなことないって。」

「じゃあ、例えば、とりあえずコリとよりを戻しました。でもちょっとしたらまた魅力的な子が現れて、そしたらそつちの子の方が本気で好きになつちゃつて、そのときのヒロの言い訳。あのときはコリのこと好きだつたけど、今は違う子が好きになつた。ぼくはいつだって正直だ。なんてしゃあしゃあと言つんでしょ。」

「すげー妄想・・・。」

「なんか言つた？」

「いや、別に。正直に言つと、今、コリに惹かれかけている。でも、そう思つてゐるときでさえも他の女に魅力を感じることはあるよ。そういう状況は、本気の好きでないと言われてしまえばそれまでだけ。」

「本音を言つてくれてありがと。ヒロが一段とかつゝよく見えたわ。本気で好きになつちゃいそう。」

「それはどうも。」

チカはヒロに背中を向けたままつぶやいた。

「魅力を感じる他の女つて誰かしらね。うらやましこわ。」

コリにメールを打つた。チカに諭された結果と言つのは不本意だが、チカの言つことはもつともだ。

「今、コリの家の近くのファミレスにいるから。コリが来るまで待つてる。」

だいたいコリが自宅にいるとも限らないのに。まあいいさ、今コリに惹かれ始めているといつのは本心だ。鎧を一枚ずつ脱ぎ捨ててゐるにはまずこの儀式から入る必要がある。自分で正直に生きるためにも、この一歩ははずせない。

まさかすぐにユリが来るのは思わなかつたけど、結局僕は5時間もファミレスにいる。コーヒーだけ頼んで待つていたが、やがて腹が減り、なすとトマトのペンネを注文し、それをすっかり食べ終わつても、何の音沙汰もなく、コーヒーのお替りを繰り返す。持つてきた週刊誌も読み終え、ファミレスに置いてある新聞を隅から隅まで読みつくした。

本当は、壊れかかってる一人の関係をつくろうのためにこいつして待つているわけなのだから厳かに待つことに徹するつもりだつたのだが、何もしないで待ち続けることに根をあげた。

メールの着信音だ。ユリからだつた。

「ヒロ、ファミレスの外で待つてたから、すぐ出て来て。」
外に出ると、自転車置き場の隅にユリが立つていた。

「ユリ……。」

「私、ずっと見てたの。ヒロからメールをもらつてすぐ、外側からヒロのこと観察してた。最初は緊張した顔だつたのに、そのうち何か食べ初めて、最後は週刊誌に新聞！私、てつきりヒロが私にすがつてくるものだとばかり思つてたのよ。それがどう。なんか普通に友達と待ち合わせするみたいな雰囲気だつたけど。」

ユリは駄々をこねる子どものように目を真つ赤に腫らして、じだんに踏む勢いだつた。

「ユリ、俺、ユリと一緒にいたいんだ。」

正直にならうと思った。今の気持ちをユリに伝えたい。

自然に体が動いた。ユリをただ抱きしめたら、心が軽くなつたのがわかつた。ユリは甘いにおいがした。出会つた頃と変わらないあの匂いだ。

「ばか！はぐらかされないんだから。」

ユリの体は震えていた。僕は小さな子供もあやすようにユリの背中をやさしくさすつた。

東京ではめずらしく雪が降った。ヒロは寒さのあまりコートのポケットに両手を納めたままの姿勢で歩いていた。

「仙台なら雪なんか珍しくないんでしょう？」

ユリはヒロのポケットの中に手を忍び込ませてみた。どんなリアクションをとるんだろう。いろんなことをしてヒロの反応を見てきたけど、ヒロはいつも感情の起伏を感じさせない。手紙の件だけは例外だったけど。

「でも積もることはあまりないよ。」

ヒロは「ぐぐく」自然にユリの手を握った。包み込む手は温かく、全てを受け止めてくれるようだった。ユリはいたずら心でしかけた振る舞いを一瞬恥じた。

「へえ、なんだか意外。」

ぽんやりとヒロに委ねて心がふわふわと漂つてこるようだった。

「東京の人はそう思つていてるみたいだよね。何回か言われた。仙台

＝東北＝雪みたいな図式ができるのかな？」

「やうだと思う。私もそう思つてたもの。」

ヒロのものの言い方はどこか洗練されていて知性を感じる。そんなところも好きなんだなとユリはあらためて確認する。

「でも、やっぱりきれいよね。」

本当だ。無機質な東京のビル群がみんな白く塗られる。汚れたものはみんな覆い隠されるかのように、清らかな風景に変わっていく。

「私、雪、好きよ。」

「うん。」

「みんな真っ白にしちゃうでしょ。きれこわいぱりつてこうか。ダメなのも帳消しにしてくれるみたいに。」

「だめなもの？」

「例えば、私とか。」

「ユリが？」

「ふふ。やだあ、そんな驚いた顔しないでよ。」

今なら聞ける。今聞かなかつたらいつ聞いてるんだろう。

「ヒロは自分のこと好き？」

ヒロはいつもと変わらず穏やかな受け答えをしていたが、一瞬視線をはずした。

「好きか嫌いかって言われたら嫌いだな。」
立ち止まって空を見上げた。

「そつか、なんかそんな気がしたんだよね。」

「どうして？」

ヒロの吐く息が白く漂つた。

「初めて会ったとき、この人私と似てるって感じたんだ。だからヒロに話しかけたの。でもヒロ、「俺に話しかけるな」オーラを出してたでしょ。勇気いつたんだからね。」

「俺、絶望感いっぱいだつたし。」

「それもなんとなくわかったよ。この人こんな大学に入る気なんてさらさらなかつたんだろうなって。」

ヒロは黙っていた。

「とりあえず大学には入っちゃつたけどこの先何の展望もないし、どうしたらいいか途方に暮れていたんでしょ。」

うん、大丈夫。きっと聞ける。ユリは自分に言い聞かせていた。

「私が話かけてもすごく迷惑そつだつたもの。こいつ何言ってんの？みたいな。」

「そだつたつけ？」

「こんな美人が満面の笑みで「隣座つてもいいですか？」って聞いても、ぶすつとしてや。」

「だつたら隣座らなきやいいじやん。」

「そう言つと思つた。」

心臓がばくばく指定田。

「私見えちゃつたんだ。ヒロが腕時計を見よつとしてシャツの袖を下ろしたとき、ヒロの左手首が。」

全てが止まつた。雪も街もヒロもユリも。

「おまえ、知つてたの？知つて近づいてきたのか？興味本位でか

？」

ヒロは震えていた。体中の血の気が引いたように唇がうつまく動いていない。

「違うわ。この人は私と同じ痛みを持った人だつてわかつたから。だからヒロに近づいたの。」

ユリはコートを脱いで、セーターの袖をまくつて見せた。手首からひじにかけて無数のためらい傷と手首に2箇所深い傷が見えた。

「私たち同じよ。」

ユリは微笑んでいた。

雪はやむ気配などなかつた。その日東京では珍しく大雪注意報が出ていた。

「ユリ、でもたぶん同じじやないよ。」

ヒロは小さくつぶやいた。

ユリには聞こえていなかつたんだろう。ユリはいつもと同じように、僕の腕にしがみついてきた。ユリは幸せそうに笑っていた。

あの日、僕が父と言い争いをした日、父はグラスのかけらだけがをしたことになつていて。しかし、それはとつさに父が母に言つたことだ。

事実ではない。

あの日、父に責められた僕はとつさにカウンターに置いてあつたアイスピックを握り締めていた。あの瞬間、僕は父を消してしまおうと思った。そうすればすべてが終われるような幻想を抱いていた。

「うわああああああああああ。」

僕は両手に握つたアイスピックを振り上げた。

父はすぐに気づき、抵抗した。屈強な父だ。軟弱な浪人生の僕などに負けるはずがない。しかし理性をなくした僕の力はすさまじく、アイスピックの先端は何度か父の両手を突き刺し、血が飛び散つた。

最後にアイスピックは、払いのけた父の手から宙に舞い、そして僕の左手首に突き刺さった。

これが真実だ。

母は知らない。母の悲鳴で、たまたま帰省していたハル兄が異変に気づき、すぐさま下に降りてきた。

「ヒロ、こっちへ来い。」

ハル兄の機転で、僕は母に知られることなく、病院に連れて行かれ手当を受けた。病院では自殺未遂といつことになっている。しかし真実は殺人未遂だ。

「おまえは早く家を出る。医者になるのなんかやめちまえ。」

ハル兄の言葉が頭の中で何度も繰り返された。

「ヒロ、おまえは何をしたいんだ。その答えを探すために進むしかないんだ。ここに立ち止まつていちゃだめだ。」

「ただいま。」

「お帰り！」

カイが飛びついてきた。

「お母さんは？」

「買い物に行ってる。カイはお留守番なの。」

「カイ一人で？」

「ううん、コカちゃんと。」

コカはリビングのテーブルで分厚い本からノートに何か書き写している最中だった。

「コリ、お帰り。」

ユリの方には目もくれないで、ひたすらその作業を続けていた。

「カイ、ユカと遊びたかったんじゃないの。」

「だってユカちゃんはお勉強で忙しいから、僕は邪魔しないようつづて……。」

カイの聞き分けのよさが不憫でいたたまれなかつた。

「なんでカイがユカに気を遣うのよ。」

ユカに対する怒りがこみ上げてきた。

「ユカはそんなんでいいわけ？」

思わず大声になつた。

ユカはちらりとユリの方を見ただけでこつこつと話した。

「私は、今やらないといけないことがあるから。」

ユカの冷静な態度はいつも私を逆上させる。

「そんなんで……。ユカはいつもやつ。自分のことしか考えていない。田の前にあるのはビーツでもいいわけ？ビーツせまた病院に入り浸つてるんでしょ。」

こんなふうに声を荒げてもユカの態度は変わらない。

「大きな声出さないで。」

「ほんと、ムカつく。」

「病院に行くのは私がそこの学生だから。変な言いがかりつけないで。」

「自分のことをいつも正当化して、なんでもやりぬいたやう人だよ、ユカは！」

「カイもいるんだからね。こんなところで私はユリと言ふ争いをしたくないの。」

「カイのことちやんと考えているみたいな言い方はよしてよね。笑つちやう。せんぜん説得力ないから。」

「ママーー。」

カイが泣きながら母親にしがみついていた。一人のやり取りをずっと見ていたのだろう。すっかりおびえた表情をしている。

そして母が買い物袋を持ったまま、ドアのところに立ち渴べしていた。能面のような血の氣の引いた白い顔だったが、怒りで体が小刻みに震えている。

「コリ、いい加減にしなさい！カイの前で何を言つてゐるの。」

母が声を荒げるのは、めつたにないことだった。

「私、出かけてくるから。」

ユカが本を抱えて立ち上がつた。

「ママ、ユカはどうせまた病院へ行くんでしょう。」

母は何も言わなかつた。

私はまちがつているのだろうか。

私には進むべき道がもう一つしかない。そこにたどり着くために全てを犠牲にしてきた。ためらいがなかつたと言えば嘘になる。でも、ためらつている時間は私にはなかつたから。だからためらわないよう自分を戒めてきた。

ユカは電車の中でぼんやりと考えていた。読むつもりで膝の上に開いた医学書の文字が目で追つても頭に入らない。

通勤時間外の車内はそこそこ空いている。新宿駅で多くの乗客が降りた後なのでなあさだら。

向かいの座席に、カイと同じ年くらいの男の子が母親と並んで座つた。髪の毛を坊ちゃん刈りに切りそろえていて、きちんとした家庭の子といった印象だ。電車には滅多に乗らないのだろう。落ち着かない様子で車内をきょろきょろ見渡している。車窓を覗こうと、靴を脱ぎ後ろ向きに座つてそれなりに楽しんでいたようだが、それにも飽きたのだろう。

「ママ、なんか食べたい。」

男の子が母親にねだりはじめた。

「だめよ、電車の中では。もうちょっとの辛抱だから待ちなさいね。」

母親がたしなめるが、男の子は引かない。

「ねえつたらいいでしょ。」

母親は何度かなだめようとしたが、車内で男の子に泣かれても困ると考えたのだろう。バッグの中からキャンディーを取り出して男の子に渡した。

「これで我慢しなさい。いい？」

「うん。」

途端に男の子の機嫌は直り、キャンディーを嬉しそうにほおばつた。

「お母さん、おいしけ。」

靴を履きなおして母親にもたれかかるように座つた。

穏やかな光景。母と息子のよくある幸せな一コマだ。しかしユカにはただそれだけには思えなかつた。どうしても男の子とカイが重なつて見える。

無邪気に母親に甘える男の子。幸せそうなその姿。幸せ？こんなふうにじつに当たり前にすぐそこにある幸せをカイは得ることができないのだろうか。

「カイ、ごめんね。」

そつそつと涙が止まらなくなり、ユカは声を殺して泣いた。

冷たい教室の端にユリはいつも黙つて座つていた。灰色の空氣の中、私はいつも誰にも気づかれないと氣配を消そうとしていた。

「ねえ、あの子でしょ。」

氣配を消すことなんてできるわけなかつた。

容赦ない中傷が私の心をぐるぐるに突き刺していく。

「最悪！」

「よく学校に来れるよね。」

残酷な年頃の少女たちは無邪気なふりをしてナイフを振りかざす。ユリはこうべを垂れたまま、両手を握りしめる。行き場のない怒り

をじぶしに込める。

そうして一日が終わるのを待ち続ける。

あの事件が起るまでは、私は普通の中学生として、友達とおしゃべりを楽しんだり、手紙を交換したり、無邪気な毎日ばかりだった。それがあの日を境に全てが一変してしまった。親しくしていた友人たちも次から次へと去って行つた。

終業のチャイムが鳴ると、私はあわててカバンを抱えて教室から逃げ出す。まだ誰もいない廊下を走りぬけ、階段を駆け下り、昇降口にたどり着く。昇降口にまだ誰もいないことを確認し、ほっとする。靴箱を開けると小さな小箱が入つていた。恐る恐る取り出し、中身を見て、愕然とした。

「ちゃんと使えよ、バーカ！」

と書かれた紙切れとコンドームが入つていた。ユリは吐き気がこみ上げ、がまんできなくなり、しゃがみこんでゲーゲーとせこらじゅうに吐いてしまった。

靴箱の陰で少女たちがせせら笑つている。

「こいつ、まじで、妊娠してんじやないの？」

少女たちは吐瀉物にまみれたユリを見下ろし、

「もういいゲロしそう！」

腹を抱えて笑いながら去つて行つた。

その日を境にユリは学校に行かなくなつた。

「ユリは何を抱えているんだろう。」「

ヒロはほんやりと考えていた。

自殺未遂を繰り返すユリ。ヒロを理解者と信じ、近づいてきたユリ。あの白い腕に切り刻まれた無数の傷。

真夏でも「日焼けしたくないから」と言つていつもカーデガンをはおつていた、チカたちが海に誘つても、応じなかつたのは、その傷を見られたくなかったからなのだろう。

やさしそうな両親、医大生の姉、かわいい弟、裕福な暮らし。絵に描いたように幸せな条件ばかりが揃っているようにしか見えない。医大生の姉に対するコンプレックス？

そんな単純なことではないような気がする。

確かに初めてユリの家でユ力に会ったとき、不自然な感じがした。どこかぎこちない姉妹。お互い避けあつてているような感じすらした。

ユ力に会おうと思った。ユリが抱えている問題を聞けるのは彼女しかいない。そう思い立つたものの、心中で何かがうずまいていた。そのときの僕はユ力に会う正当な理由を見つけたことにもしかしたら心が躍っていたのかもしれない。ユリを何とかしたいという気持ちは本当だ。しかしつも心の片隅で、ユ力のことが気になっていた。

僕はユリの自殺未遂を言い訳にユ力と接点を持とうとしているのだろうか。

ユリに知られずにユ力に会うには、ユ力の通う大学の付近で待ち続けるしかなかつた。ハルトに間に入つてもらうという方法もないわけではなかつた。しかしあえてその方法をとらなかつたのは、ハルトに知られたくないという気持ちが強かつたからだ。全く持つて単にユリの問題を解決するためにユ力に会うのならば、ハルトに何を知られようが構うことなどなかつた。しかしそれだけじゃないことは、認めたくはないものの、自分の中では感づいていた。

駅前のカフェに来る日も来る日も通い続けた。さすがに朝から晩までいることはできなかつたから、授業の合間にできる限りの時間通いつめた。

「最近いつもいらっしゃいますよね。」

店員がコーヒーを運びながら話しかけてきた。

「誰か探しているんですか？」

「ええ、でもどうして？」

「わかりますよ。いつもこの窓際の席に座つて、外ばかり見てますもの。大切な人を探しているように見えましたから。」

大切な人・・・。

自分では押さえようとしているこの気持ちがたまたま居合わせた他人にさえも見透かされているのだろう。ヒロは自嘲するしかなかつた。

この日もユカは現れなかつた。時間帯が違うのだろうか。

明日は午前中から来てみようか。そう思いながら腰をあげようとしたちょうどそのとき、横断歩道を駆け抜けるユカの姿が目に入った。ヒロは店員に投げるようコーーーー代を渡し、駅前の横断歩道を渡つて、ユカを追いかけた。ユカが小走りで大学病院の門をくぐり、病院の中へと入つて行くのが見えた。見失うまいとその後を追うと、病院の面会受付のところでユカは立ち止まつていた。

学生として病院に入ったのだと思っていたのだが、面会受付に行つたユカ。誰の見舞いに行つているのだろうか。ヒロは見てはいけなかつたものを見てしまつたような後味の悪さを感じていた。

ユカの姿が見えなくなるのを確認して、ハルトの携帯に電話をかけた。

「ハル兄、ユリの親戚つてハル兄のとこの病院に入院してるのか？」

「なんだよ、突然。」

ハルトにカマをかけてみたが、読み違いだつたのか。

「ユリつておまえの彼女だつけ？」

「まあね。」

「親戚つて彼女がそう言つてたのか？」

「親戚みたいな・・・つて。」

嘘がばれそうな気がしてつい言葉に力が入る。

「 」 いう話は患者のプライバシーに関わるから家族にだつて話しからいけないんだけど・・・。」

「頼むよ、ハル兄。」

「あくまで噂話と思って聞いてくれよ。いいか、おまえの彼女の姉貴の恋人がうちの病院に入院しているんだ。」

何かがつながった感じがした。それでユカは面会受付にいたのか。

「その人どこが悪いの？」

「どこつて・・・あれは治りようがないな。」

「病気なのか？」

「いや、6年位前かな、バイクの事故で水島さんが運ばれてきたのは。俺はそのときはまだ研修医になつてなかつたから直接は知らないんだけど、ひどい事故で病院に着いたときにはすでに脳死の状態だつたんだ。」

「水島さん？」

「ああ、水島さんは当時この医大生だつた。」

「そのとき付き合つてたのがおまえの彼女の姉貴で、当時まだ高校生だつたんだよ。しばらくの間、けなげに病院にも通いつめてたらしいんだけど、まだ高校生だろ。そのうちに来なくなつて、みんなそれつきりなんだろうつて思つてたんだけど。そしたら何年かしたら、うちの医学部に入つてきたんだよ。びっくりだろ？ 大学に入つてから聞いたんだけど、その子、結局彼氏の事故の後高校中退しちやつて、大検受けて、うちの医学部に入つてきたつて言つから只者じゃないと思うよ。」

「まさか彼氏を治すために医者にならうとしているのかな。」

「そうかもしれないな。でもわかつたんじやないか。自分が医学部に入つて彼氏の容態がどれほど悪くて回復の見込みがないかつてとも。」

「前にも、ハル兄が言つてただろ。曰くつきの女つて。それつてこのことだつたのか？」

「これだけじやないさ。教授とできてるつて話もあつたりな。いつ

もピンで行動してるし、やっぱやばい感じがするよ。面会も夕方に
なつてからこそそつと来るらしいしな。」

エレベーターを降りて、いちばん突き当たりの部屋が水島の病室だつた。ユカは誰も来ていなことを確認してからそつと中に入った。いつもと変わらない真っ白な部屋。そしていつもと変わらないあなたがそこに横たわる。6年前と変わらないあなたの規則正しい呼吸だけが静寂の中に存在する。

ユカは、横たわった手にそつと触れてみた。温かなぬくもりが伝わってくる。手首に触れれば生命のほとばしりが皮膚を通してはつきりわかる。

「孝介。」

手を握つても握り返すことはない。ましてや答えてくれることなどあるわけがなかつた。でも、この手に触れれば、すぐに思い出せる。短くも水島孝介と愛し合つた日々を。その事実は色あせることがなく、ユカの記憶の中に確かにたたずむ。

ドアを遠慮がちにノックする音がした。

「先生。」

兵頭医師だった。この病院の医師であり、大学教授だ。6年前の事故のとき、教え子だった水島の担当となり、以来全てを見つめてきた。

「この時間なら君に会えるかと思つてね。」

「じ家族がいらっしゃらない時間じゃないと私は来れませんから。」

ユカはそつとうつむいた。

「水島君のじ家族には会つていないのでですか。」

「ええ。」

「いつからかな。」

「事故の直後はよくじいで鉢合させてお互につりつり想いをしたもの

です。それ以来ですから、ご両親には5年は会つていません。」「では、水島君のご両親は、事故の後、君がどんなふうに生きていられたのか、ご存じないのですか。」

「おそらく。」

兵頭はしばらく黙っていた。静かにため息をつくと、患者が横たわるベッドを見つめた。

「みなさんがつらい思いをされてきたのですね。6年もの間。」

兵頭はユカの顔をじつと見つめた。

「新館さんは、本当によくがんばってきましたよ。」

兵頭の手がユカの頭をぽんと撫でると、ユカの頬を涙が静かについた。

「私はあなたに会つたことを昨日のことのよつによく覚えていますよ。あなたはまだ高校生で、しつかりはしていたが、やつぱり子どもだった。とても賢くて純粋で、私には痛々しいほどでした。」

ユカは笑おうとした。

兵頭の目に映るユカはどんな顔なのだろう。

「今ここにいられるのは先生のおかげです。」

「いいえ、あなた自身の力ですよ。」

「先生が励ましてくださらなかつたら、私はこうして医大に進むことはなかつたでしょう。」

兵頭は6年前のことを思い出していた。

水島が運び込まれ、ICUで処置が施されたあと、兵頭は自分の教え子の身に起こつた不幸に一人嘆き悲しんでいた。

長いすに腰かけ、頭を抱えていると、どこからかすすり泣く声が聞こえた。その声の主が暗い廊下の隅に呆然と立ち尽くす小さな細い影であつたことに気がついた。それがユカだった。

「お嬢さん、どうしたんですか？」

兵頭が話しかけると、ユカは泣き崩れた。

「私に会いにくるつて約束していて、それで孝介は……。」

あの日、ユカが心配なことがあるからと孝介を呼び出していた。

局地的な大雨が東京に降った日で、待ち合わせ場所に急いだ孝介はバイクでスリップして転倒。そのまま道路に放り出された。ユカの目の前で起こった事故だった。

「私のせいなんです。私が呼び出さなければ、孝介は……。」

ユカはゆっくりとソファーに腰を下ろした。

「先日、水島君のお父上が私のところにきましたね。あなたも今の水島君の状態はよくわかっているとは思うのですが。機会があるたびに、酷な話ですが、ご両親に水島君の脳が蘇生する可能性がほとんどないことを伝えてきたんです。もちろんお母上はつい分取り乱されまして、やはり受け入れられないのですが。」

兵頭は窓の外の東京の夜景を見つめたまま言った。
「しかしお父上はそろそろ延命治療を終えて水島君を楽にさせてあげてもいいのでは、と私におっしゃった。」

ユカは何も答えられなかつた。

「あなたもそういう心つもりでいてください。」

数日後、ヒロは面会時間が終わる頃を見計らつて病院の外で待つていた。

エレベーターのドアが開くと、ユカが現れた。疲れきり、生氣のない青やめた顔が、声をかけるべきか、一瞬躊躇させた。

「新館ユカさんですよね。」

ユカは驚いた顔で振り返つた。

「どちらさまですか。」

「駒田です。えっとユリさんの友人で、一度そちらのお宅でユカさんにお会いしたことはあるんですが……。」

ユカは目を見開いて言った。

「ああ、あのときの。でもどうしてこんなところに。」

「いえ、僕の兄がここ的学生で、ついさっきまで兄と会っていたんですが、今その帰りなんですよ。駅に向かって歩いていたら、ちょうどあなたが目に入つて。驚きました。」

咄嗟に思いついた嘘が滑らかに口から飛び出した。ユリはその言葉をすっかり信じたようで、

「あら偶然。私もここ的学生なのよ。」

と微笑んだ。

そのときヒロの中では、以前ユリの家のキッチンでユリに初めて会つたときの衝動がフラツシユバツクしていた。

「あの、ちょっと時間ありますか。ユリさんのことや・・・。」

ヒロは駅前のカフェにユリを連れて行つた。ユリのこと、と言われたことで、ユリはためらうことなくヒロの後についてきた。いつもの窓際の席に座ると、店員がメニューを持つてやってきた。

「「ユリ、ユリ、ユリ。」

あなたの大切な人なんですね、と言いたげな微笑をヒロに向かた。店員が席を離れるヒロは本題に移つた。

「先日ユリさんに気になることを言われて。でもそのことをやつぱり本人には確認できなくて、困つていたんです。ご家族に聞けばいいんでしょうが、ユリさんに知られずに聞くことはなかなかできないことですし、偶然お姉さんに会えてよかったです。」

「ユリはどんなことを言つたんでしょう？」

ユリは不安げな顔でヒロを見つめた。

ヒロは唐突に切り出した。

「ユリさんはどうして自殺未遂を繰り返したんですか。」

ユリの顔は一瞬青ざめたが、すぐに平静さを取り戻したようだつた。ヒロの顔をまつすぐ見つめ、そしてしつかりと言い放つた。

「その理由をあなたに伝えたからといって、何ががくなるとは思えないわ。ユリを支える自信がないのなら、ユリから離れてあげるのが親切よ。中途半端な愛情ならいらないわ。」

「でもユリは苦しんでいる。救いを求めている。」

「そんなことあなたに言われなくたってよくわかっているわ。でもね、ユリは自分自身で乗り越えなければだめなのよ。誰かに救いを求めて一瞬救われたような錯覚に陥るかもしれないけど、そんなの本物じゃないわ。」

悔しかつた。ユカの言つことはすべて正しく、反論の余地など全くなかつた。

「あなたは強いからそんなことが言えるんだ。」

「私が強いですって？」

一瞬口元が笑つたように見えた。

そしてユカは黙つて席を立つた。

明日までに提出しなければならないレポートをまとめあげたとき、時刻は夜中の11時を回つていた。チカは、ほつと一息ついてミルクティーを入れようと思い、やかんをガスコンロにかけた。やかんが沸騰を知らせるピーというやかましい音がするのと同時に、玄関のチャイムが鳴つた。

「こんな時間に誰。」

恐る恐る覗き穴を覗いて驚いた。玄関に立つていたのはユリだった。

「まつたく、どうしたのよ。」

「ごめん、チカ。」

チカはユリに部屋に入るよう促した。

「あのねえ、いきなりたずねてこなくつたつていいでしょ。せめてメールで予告してちょうだいよ。こんな時間だよ。変な人が来たのかと思うじゃない。」

マグカップにミルクティーを注いで、ユリに勧めた。

「ごめん、でもいいの。どうせ私変な人だから。」

二人は熱いミルクティーを飲みながら顔を見合わせて笑つた。

「で、なにか用があるんでしょ？」

「なんでチカのところに来ちゃったんだね。」

「ちょっと待つて。勝手に来ておいてそんなこと言わないでよ。」

「うん、冗談で言つてるんじゃないの。私、ヒロのところに行けなかつたんだよ。」

「けんかでもしたの?」

「うん。」

コリは、マグカップで両手を温めながら添えて黙りこなつた。何かあつたんだ。

チカはすぐに察した。

「こくとこないんでしょ。今日まではひた泊まつたら。」

コリは痛々しこぼじ小さく、親を亡とした小鹿のよつな顔でチカを見つめた。

「ありがとう。」

そして心底ほつとしたといつよつな顔で笑つた。

チカは布団を2組並べて敷いた。シャワーを浴びたコリは髪の毛を拭きながら部屋に入つてみると驚いたよつに言つた。

「チカの家、ちゃんと布団2組あるんだ。」

「そうだよ。うちのお母さん、突然来て泊まつたりするからねえ。」

「マジで?」

「うん。だからさつとコリが来たときもまさかいつのお母さん?つて一瞬焦つた。」

「チカのお母さん、心配してゐるんだね。チカに変な虫がつかないかつて。」

「入らん心配なんだけども。彼氏ができる気配なんかまったくないじゃん。」

「チカ、今好きな人いないの?」

「前はヒロのこと結構いいなつて思つてたけど、コリとつまくいくつちやつたし。」

「『めん。私、チカの気持ち、本当はちょっとわかつてたんだ。』
ユリが困った顔をしている。

「いいんだって。気にしないでよ。」

チカは笑い飛ばした。

「それにヒロ、私に直接言つてたもん。ユリに惹かれてるつて。私
そのとき思つたんだ。いくらがんばつてもヒロは私を選ばないなつ
て。」

「チカ……。」

ユリがチカに覆いかぶさるように抱きついてきた。

「ちょっとユリ。私そんな趣味ないからね。」

ユリはチカに抱きついたまま離さない。

「チカ、私、今すぐく友情を感じてるの。チカを抱きしめたいつ
て衝動がこうさせてるの。」

「わかつた。ユリのそういうところかなわないよ。」

「チカ、本当にありがとうね。大好きだよ。」

「わかつてるつて。私もユリのこと大好きだよ。」

二人は布団に入つてもおしゃべりが止まなかつた。大学のこと、ク
ラスメイトのこと、好きな音楽のこと、ファッショント。どちら
かが黙つてしまつたら、それで永遠に終わりみたいな不安がこみ
あげてきて、どちらかが必ずしゃべり続けていた。

「でもさ、チカのお母さん、そんなちょくちょくここへ来るの?」
「うーん、平均すると月に一回くらいかな。これでもだいぶ治まつ
てきたんだけど。」

「月一で?」

「うん。だつて入学したての頃なんかは2週間に一度のペースだつ
たからね。」

「すごいね。でもそんなに心配なんかね。」

「たぶんお父さんの差し金だと思つんだよね。自分が動くと娘に嫌
われるからさ、お母さんに偵察させてるんだと思う。」

「チカ、愛されてるんだ。」

ユリは、心配してアパートのドアを叩く、チカの母親を想像してみた。チカの好物をプラスチックの容器にたっぷり詰めて冷蔵庫にしまっている姿が思い浮かんだ。

「そうねえ。でも普通でしょ。ユリなんか十分愛情注がれて育つたつて感じがするけど。」

「どうなんだろう。よくわからないや。」

「これだからお嬢ちゃんは！」

少しの沈黙の後、チカが寝息を立て始めた。

ユリはわかつていた。両親が自分に愛情を注いで育ててくれたこと。でもその量をいつもスプーン1杯分でも、自分に多く注がれたいといつも思っていた。自分でもいやになるくらい独占欲が強いのかもしない。

ユリとユリは2才違いの姉妹だ。年が近いことから一人はよく比べられた。

ユリは、小さい頃から落ち着いてしつかりした優等生タイプの子どもだった。聞き分けもよく、手のかからない、いわゆるいい子。一方、ユリは、依存心が強く、甘え上手な子どもだった。いつも友達に囲まれ、にぎやかにしていることを好んだ。ユリが静なら、ユリは動。二人は対照的な姉妹だった。

普段の暮らしの中では、ユリはいつも満たされていた。年の小さいユリの方が、父も母も手をかけることが多かった。ところが、たまにユリが高い熱を出したり、けがをしたりすると、父も母もユリのために必死になつた。ユリはそういつたとき、言いようのない不安に駆られ、両親の後姿を息を潜めてうかがつっていた。ユリの具合がよくなつてほしいというより、早くユリが回復することで両親の愛情を取り戻したい、そう願つていた。そういうポツリポツリといつた出来事は、ユリを長く苦しめることはない。ユリはしばらく待てば父からも母からもまた十分愛されるということを経験上わかつ

ていた。

しかしその日の事件はその定説をもの見事に打ち破ってくれた。

「いやあ、すごい雨。」

母が窓の外を怪訝そうに眺めた。

「大雨洪水警報が出てるみたいだよ。」

テレビのニュース速報で東京23区がその対象になつてることを知つた。

「やだあ、どうしよう。ユカちゃんがまだ帰つてないのよ。」

「何言つてゐる、ママ。ユカちゃん、もう高校生なんだから、雨宿りでもなんでも自分でかんがえてするわよ。」

ユリは中学生だった。リビングで試験勉強の最中だ。

「そうよね、自分でなんとかするわよね。」

心配そうな母の顔は幾分緩んだかのように見えたが、実際、母は落ち着かず、キッチンとベランダを行つたりきたりしていた。

母の不安は的中したのか、その日ユカは夜9時を過ぎても帰つてこなかつた。

ユカの友人宅に片つ端から電話をかけているそのとき、電話のベルが鳴つた。

「はい、新館でございます。」

緊張が走つた。

「はい、はい。わかりました。今すぐに迎えに参ります。」連絡いただきありがとうございました。」

母は電話の向こうの相手に、丁寧に頭を下げた。そして受話器を置いた途端、その場に座り込んでしまつた。

それが兵頭医師からの初めての電話だつた。

「先生、お願ひがあるんです。」

ひとしきり泣き、ひとまずユカの気持ちも落ち着いてきていた。

「もうすぐ両親がここに来て、私は一人に説明をしなければなりません。両親は、私が水島さんと交際していたことすら知りません。しかもこんな事故になってしまって、ものすごく動搖すると思います。」

ユカはまだ高校生のはずなのに、1人の人間として確固たる考えを持つていた。

「それに私はもう一つ一人に話さなければならぬことがあるんです。」

「もう一つ?」

「ええ。おそらくその話は冷静に聞くことなどできないと思います。」

「それはいつたい・・・。」

ユカは兵頭をまっすぐ見つめた。その無垢な瞳は恐れをしらない強い意志をもつっていた。

「私のおなかには、水島さんの子供をいるんです。」

「それは・・・。そのことは水島君は知っていたのですか?」

「ええ。水島さんには電話で伝えました。水島さんは少し驚いたようでしたが、穏やかに私に言いました。結婚しようって。そしたら今すぐ会いに行くと言つて、あの場所まで来てくれたんです。」

なんと言つたらいいのか・・・兵頭は言葉が出なかつた。

「先生、私、これから両親に全てを話します。お願いです。その間立ち会つてくださいでしょつか。」

兵頭は混乱していた。

目の前のこの小さな娘はすべてを受け入れ、そこから立ち上がりつとしている。

「この娘のどこにこんな強さがあるのだろう。」

「水島さんの先生だから、お願いしているんです。」

兵頭の心の動揺を見抜いているのだろう。まなざしが強い。

「あなたはその子どもを産むつもりなんですね。」

ユカは静かにうなずいた。

兵頭は苦しんでいた。この未来ある若い一人に突然降りかかった慈悲なき悲劇を呪わずにいられなかつた。

水島とユカは障害児の自立支援センターのボランティア活動を通して知り合つた。脳外科医を目指していた水島は、このセンターで障害児と接し、障害児の脳の発達に興味を持つていた。

「教授、自閉症児の脳の機能はまだ解明されていないんですね。」

「まだこれからの分野だね。」

「僕、先生から勧められたボランティアで自閉症の子どもと出会つたんですが、びっくりしました。彼ら、発達がものすごくでこぼこで、なのに、優れた分野は健常児をはるかに超えた能力を持つているんです。」

水島は興奮気味に語つた。

「水島君、君の進むべき道が見えてきたのかな。」

兵頭は、水島の中にかつての自分を見出していた。

「ええ、おそらくそうだと思います。」

水島の目の前には進むべき道がまっすぐ続いていた。

そしてユカも水島の夢を知り、感銘を受け、追随したいと考えていた。

今、将来ある二人の若者の人生が埋没しつつあることを、何とかして避けたい。

兵頭はユカに言つた。

「もし水島君が夢を追えなくなつてしまつたとしたら、あなたはどうしますか。」

兵頭はユカの本心が知りたかった。ユカは兵頭の目をまっすぐに見つめて落ち着き払つた声でこう言つた。

「ならば私がその夢を引き継ぎます。」

「でもあなたはお子さんを産むのでしょうか？」

「ええ、もちろんです。もし水島さんに何かあつたら、私は一人分の人生を生きる覚悟はできます。」

ユカは微笑んでいた。

「わかりました。ならば私はあなたの力になります。」

兵頭は昔ドイツで見た古い教会のマリア像を思い浮かべていた。ユカの微笑みはそのマリア像の微笑そのものだつた。イエスを身ごもつたマリアは、こんなふうに毅然と出産を決意していたのだろうか。

兵頭の心中も決まつていた。

噂は瞬く間に広まつた。有名女子高の現役女子高生が妊娠、出産。ユカは余儀なく退学処分となつた。

ユカの両親にとつてそれは想像もしていなかつたことだつた。いつどんなときも周囲から賞賛の言葉ばかりかけられてきた娘ユカ。そのユカが、赤ん坊を身ごもり産むつもりでいる。しかもその父親は脳死の状態。ユカは父親のいない子を高校生という若さで産むのだ。

「あなた、いつたいどうしたら・・・。」

妻は泣き崩れた。

ユカの父も途方に暮れていた。

が、娘が中絶を選ぶことは絶対にないといつことは父としてよくわかつていた。

中絶を強要でもすれば、娘は自分の手元には絶対に戻つてこないだろ。下手をすれば死を選びかねない。

「佐和子、あの子は僕らが考えている以上に自分の考えをしつかり持つた一人の人間だ。」

ユカの父は妻に話をする一方で、自分を納得させるために言葉を選んでいた。

「私たちがあの子を守らずに誰があの子を守るんですか。あの子が

いちばんに傷ついているんです。一人でユカを守り抜きましょう。」「あなた・・・。」

ユカの母も夫の意見と相違はない。

「ユカはもし水島さんの身になにかあつたら、ユカが水島さんの夢を引き継ぐと言つていましたわ。高校中退してしまった今、どんなに学業が優秀でも医学部に入ることは不可能に近いと思います。それに赤ちゃんが生まれるんです。」

「佐和子・・・。」

「ユカが自分の意志を貫くと言つんだったら、私はあの子に私からの提案を受けてもらいます。」

「提案?」

「ええ。どんなにがんばつてもあの子が未成年だという事実は変えようがありません。あの子が赤ちゃんを産むには私たちの協力なくしてはなしえないでしょ。交換条件なんて本当はいやなんですが、今回ばかりは私の提案は譲れません。」

母佐和子の意志は固かつた。

母譲りの気性かもしだれないな。

ユカの父はそつくりな母子であることを再認識し、不謹慎にもふつと笑つてしまつた。

「佐和子・・・私はまず、あなたの見方ですから。わかつてますよ、あなたの気持ちは。」

ユカは自分の部屋にこもつていた。

カーテンを閉め、昼間なのに暗い室内で大検を受けるための勉強に身を削つていた。

「ユカちゃん、ちょっとといい?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5782c/>

ピュアソウル

2010年10月10日04時39分発行